北海道大学
歴史ノート
No. 19

「学ぶ」ということと向き合う学校
――遠友夜学校

大学文書館　井上高聡

遠友夜学校の生徒と教師（1904年、大学文書館蔵）

一八九四年、札幌農学校教授新渡戸稲造と妻メアリーは遠友夜学校を創設した。貧困などのために昼間の学校へ通えない子どもたちのため、当初は初等部、後には中等部を整備した。有志の市民が学校運営に当たり、札幌農学校・北大関係者も責任者や教師として中心的な役割を果たした。

遠友夜学校については、こうした創立者の志や継承者たちの献身など、その篤志・慈善にスポットを当てる論調が多い。しかし、そこに通う生徒たちにとってはどんな学校だったのだろうか。

兄と私は唯一人の親なる母を慕ふて睦まじく其日々々を楽しく暮らして、昼は兄が鉄道の運輸事務所に出て居て、私は母の手伝をし、夜は兄と一緒にあの楽しい学校へ行くのを一生の楽しみとして居ります。（尋常科六年、酒井うめの、一九一二年）

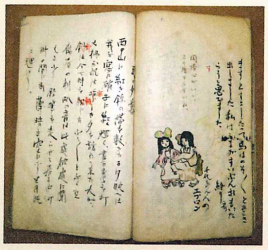
我が遠友夜学校には生徒百余名ありて、皆一心不乱に此の学校にて学ぶなり。昼は営営として働き夜は学校に通ひ先生の教をばよく聞き、……度々遠足等もあり愉快に遊べる事等もありき。我等若し無学ならんには人相手にせずして、且何等の楽みもなく暮らさざるべからず。……自分は今勉強することを得るを嬉しく思ひ丁度勉強するに良き時なりと思ひ、日夜勉強のことを考へて居るなり。（尋常科六年、青山イチ、一九一七年）

生徒たちは、遠友夜学校に通う喜びや、働きながら学ぶことの意義を作文に書き綴っている。一方で、学ぶことの困難さや挫折感を拙い文章表現で吐露する生徒もいる。

長い月日の間には非常な雨風もあり、又は寒気のはげしきときもありましたけれども学校へ参りました。しかし学校へかよってをると云ふばかりなのでした。……家に帰ったり仕事にいったりすると夜学校にかよってをるとゆー事を忘れて学校又は先生にたいして申しわけないおこなひを致すよーな有様で……。（高等科一年、小野崎みゑ、一九〇八年）

遠友夜学校は一九四四年の閉校までに千人以上の卒業生を送り出したが、その何倍もの中途退学者が存在した。生徒は、昼間には職工、給仕、店員、子守、家事手伝いなどの仕事をしており、夜学校への通学は容易ではなかった。しかし、卒業生も中途退学者も、「学びたい」という思いと共に入学し、一時にせよ、自ら「学ぶ」ということと向き合った。遠友夜学校はそういう学校であった。

生徒たちの、「学びたい」という思い、「学ぶ」ことへの喜び、戸惑い、躓き、悔恨、諦めなどの積み重なりが、遠友夜学校を成り立たせていた。


遠友夜学校生徒の作文集「文の園」（1920年、大学文書館蔵）